# 日米文化の家事分担

中　村　平　治*

加州のとあるレストランで食事をとっていると、私の真向かいのテーブルに５人家族がにぎやかに走りより、着席した。30 代ぐらいの夫婦と園児 2 人と、赤ちゃん 1 人の構成であった。騒々しい家族のやりとり、動作は日本でも同じだと思いながら見渡していたが、違っている点にも気づいた。その点に注目すると、違いが次第に膨らんできた。それはお父さんの活躍振りであった。せわしく動き回っていたからである。お父さんは赤ちゃんを抱っこしながらも、座っている奥さんと子供たちのところへ、せっせと注文しておいた食べ物とか飲物を運んでいた。ジュースがこぼれたとき、真っ先に立ち上がり、拭きとっていたりもしていた。お父さんは赤ちゃんにミルクを飲ませており、自分自身、食にありつけそうにもなかった。お母さんの方は、忙しそうに動き回る夫に同情的な眼差しを向けながらも、悠然と食事を楽しんでいる風であった。この風景を目の当りにして、夫と妻の役割は、日本の場合と、逆だと思った。英語圏のご主人は家事を精力的にこなし、奥さんの負担を積極的に軽くすると知識では受けいれていたが、これがその実態だと、私は複雑な思いで見入っていた。ご主人のせわしい起居振る舞いに感心しながらも、男尊女卑の社会から来ている私にはとうていできない相談だと思い知った。

上の事例は、表題の「文化による家事分担」の違いをまざまざと見せつけて

* 福岡大学人文学部

くれる。違いの明示化を迫るであろう。日米文化の違いを文明化しておくことは、さまざまなご利益をもたらし、貴重な情報源にもなる。例えば、日本人男性が米国の女性と結婚し、永住するとしよう。このとき彼は「郷に入っては郷に従う」ように仕向けられるであろう。日本人の慣行・風習を引きずっていては新社会の波に乗れないからである。このとき、違いの情報源が参考になり、生きていく上での指針になる。

例えば、「お父さんが赤ちゃんを抱っこし、授乳する」という文化的な行為は日本人男性が避ける傾向にあるだけに特記に値するであろう。この種の記述には、もちろん、例外が待ったをかけ、一般化を拒む。単純に明文化できない面がある。しかし、それでもなおあえて挑戦してみる価値はある。これに寄与するため、論を起こすわけであるが、それにはひとまず、枠組み設定から出発しよう。

## 1　枠　組　み

日米の家事分担を明記するには、ひとまず、状況というか条件付けをしておかねばならない。でないと、紐の付いていないタコ同然になってしまうからである。不安定では押さえようがないからである。

家事という行為を論点にするからには、行為（担当）者は誰かが一つの条件になるが、ここでは日米の典型的な家族構成を頭におこう。勤め人のご主人と、米国の場合兼業主婦の、日本の場合専業主婦の奥さんと、手伝いのできる児童としよう。赤ちゃんも子守の対象として加えよう。

奥さんが仕事を持っている場合と持っていない場合とでは、役割分担に大きく影響を及ぼすが、これは現実にそうなっているから止むをえない。板坂元氏の統計によると、夫婦共に働いている場合、家事は平等にすべきだという意見が、男性について、日本 23％に対して、米国 73％となっている。かかる見解

の相違があるから、米国のご主人は家事を、日本人以上に、気安く頻繁に担当しているということになるのである。

以下に展開する指針によると、日米間で分担の差が歴然としているが、これはいま言った見解の相違が、そして米国では現に外に仕事を持っている主婦が多いことが原因になっている。一方、日本では「夫は仕事、妻は家庭」という分業意識が根強く残っていることが担当の幅を広くしているのである。

論点の担当者が「誰か」が設定されると、次は「何を」つまり家事（domestic chores）の特定化は何かに移る。家での雑仕事といえば、炊事、洗濯、掃除、買物、子守、などが思い浮かぶが、これらは雑然と並べるのではなく、組織化して捕える方がすっきりする。特定化された家事について、担当者は誰が引き受けると記述する方が分かり易い。

それから、新しい家事の概念として「情愛」の表出を提言したい。愛の気持ちを口頭によって、また行動によって相手に示すことは、庭掃除とか皿洗いを手伝うのと同じ認識に基づくと見るからである。

以下、組織化した家事の名称を小見出しとして掲げ、概観を述べ、該当の例文を挙げ、日米の比較をしよう。

## 2　家事と分担者

### （1）炊事関係

食事の用意のため料理また煮炊きをするのは主として妻の方であるが、とりわけ米国では夫も積極的に加勢をする。一昔前までは夫が妻のために朝食を準備（fix）し、起きがけの妻のベッドに運んでいたという。Rozman & Kato によると、映画「或る夜の出来事」で Clark Gable が Claude Colbert に対してその役を演じていたそうである。荒くれ男のイメージが強い西部男が朝食を女のもとに持ち運ぶなんて、今日ではあまりにもめめしすぎて、現に起こりが

たいが、1930 年代はそれほど unmanly な行為だとは見なされなかったようである。しかしこういった運び方は、日本では昔も今も考えがたい。用心棒役の三船敏郎が香川京子のため食事を運ぶなんてありえない。男のするべき行為ではないからである。

米国でも今日では男が女のため朝食を運んだりする慣習はなくなったが、コーヒーを用意し、妻のカップに注いでやったりするのは日常的によく見かけられる。この慣習から妻が夫に Would you make me a cup of coffee? と頼み事をしても少しも不自然ではないが、日本で女房が「オイ、お茶」なんて命令したら大変なことになる。

男の料理といえば、小説の The bridges of Madison County の中で Kincaid が人妻の Francesca に向かって、Can I do something? と申し出て、こまめに料理の手伝いをする場面が思い出される。次の行為は日本の男性に当てはめがたいであろう。

...set potatoes on the counter
...chop vegetables
...fix a stew
...cube the vegetables
...cut and chop the carrots, turnips, onions, …

米国では夫が料理するのは決して珍しいことではないので、Do you think we should have an omellette for breakfast? と妻が夫に依頼しても決して横柄には聞こえない。しかし日本では生起しがたい発言である。日本の男性には「男子厨房に入らず」の認識が根強く残っているからである。

以上の言及から「料理」に関しては、米国では妻が主に担当するとしても、夫も補佐として積極的に加勢をするが、日本では妻が専属的に受け持つと、ま

とめてよいであろう。

料理ができあがると、次にそれらを食卓に運び並べるという作業が待っている。それを執行する配膳係りは誰であろうか。また食後、後片付けとして、食器類を流しに運び、皿洗いをするのは誰であろうか。これらは主として、お父さんと子供の分担であろう。料理を作るのはお母さんで、後始末をするのは男性のようである。次の事例に見る通りである。

John spread supper for us.
He could at least dry dishes or something.
He washed up the dinner things.
The son helped with the cleaning up after meals.

皿洗いが、米国で、男性の分担であることは、妻が夫にしばしば Wash up this plate, will you? とか Dry the dishes, will you? と頼むことからも推し量れよう。といっても、妻が加担することは言うまでもない。

上の例で示したように、米国では料理を作ることも、残務整理をすることも家族全員の協同作業という印象を強く受けるが、日本人の男性はこの点、怠慢である。家で、男は我が大将で、何もしないでデンと構えているという感じである。このふてぶてしさをアメリカ人の K. Mori は次のように描写している。

「（日本の女達は）台所を磨いたり、お皿を洗ったりするのに懸命である。夫は帰宅するや、お茶とか飯！と怒鳴る。食卓にお湯をこぼしても自分で拭かない。妻にさせる。妻は silent hostess で errand-woman である。これに対して米国の夫妻は何事も jointly に行なう」

上の言及から、食事の後片付けは、米国では、主として夫と息子の役割であるが、日本では、妻に任される、というふうにまとめられよう。

### （2）子守・世話

顕著な分担に「おむつの交換」がある。主に担当するのは母親であるが、米国では父親もいとわない。日本では男の介入すべき世話ではないと見なされているが、米国にはそのような偏見はない。父親も恥じ入ることなく協力する(Rozman & Kato)。次の例に見る通りである。

John changed its diapers.
Husbands and wives are exhausted from diaper change.

次に「授乳」も主に担当するのは母親である。乳児に乳を飲ませることができるの母親だけだからである。しかし、近年では哺乳瓶でミルクを飲ませることが多くなっている。これなら父親でも赤ちゃんの口に含ませることができるし、実際に、多くの米国人男性が引き受けている。しかし、日本では依然として、「おむつ」と同様「授乳」は男のすべき行為ではないとみなされる。

The husband helped with the feeding of the infant.
He fed the baby with a spoon.

一口に乳幼児の世話といっても、母親に密着したものと、それほどでもないものまで多様にあり、後者のとき、父親の介入が台頭する。例えば、テレビを見ていて、床に付こうとしない幼児を両腕に抱えて子供の寝室に連れて行ったりするのは父親の役割である。米国の子供にとって 9 時就寝というのは、早すぎるかもしれないが、だからこそ、躾の好材料として利用されている。父親は

子供を早めに床に付かせるだけでなく、庭の掃除や皿洗いを強いたりすることによっても、躾を徹底させるのである。

この点、日本人の父親は子供に甘い。就寝時間もそれほど厳しくないし、躾がおおらかである。父と子が一緒に遊んだりする、つまり、手伝いや遊びを共有する時間は日本の方が格段に短い。子供の家事手伝いに関して、板坂元氏の言を次に引用しよう。

「（手伝いは）日本の子供は 30 分以内がもっとも多く、米国は 1 時間以上がもっとも多い。ここに子供の躾の厳しさがうかがえる。手伝いの内容は買物、配膳、皿洗いなどの軽いものから、掃除、洗濯、芝刈り、動物の世話、肉体的な労働などまでも含む。日本の子供はこれほどまでに手伝いの域は広くないし、平行して、家庭教育（躾）への思い入れも少ないようである」

John put the kids to bed early.
You should spend more times with the kids.
Take care of the baby while I'm out.

**（3）援護・手助け**

米国人男性は、背後に「騎士道」とか「キリストの教え」が控えていることから、女・子供などの弱者に対する「庇い」の行動が顕著である。女性を大切に援護するという精神が旺盛である。この点、日本の「男尊女卑」の認識とは対照をなし、これと連動して、家事手伝いの過多が生じてくる。

援護の内訳に「庇い」がある。例えば、歩道を歩くとき男性は危険な車道側を歩いたり、凹みがあると手を取って庇ってやったりする。女性が着席するときも、男性は女性の背後から援護する、つまり座りやすいように椅子を引いてやったり、押してやったりする。妻が服を着るときも、夫は背後から両腕が通

しやすいように調整しながら優しく被せてあげる。これが米国人男性の女性に対する「庇い」のサービスである。

しかし、日本人男性はこのように庇うどころか、逆に自分が庇ってもらうことを期待する。日本の家庭でよく見かける風景であるが、旦那さんは会社から自宅に帰宅するや、自室で背広やズボンをそこら辺に投げ捨てる。するとどこからともなく駆け寄ってきた奥さんが捨てられた衣服を小脇に抱え、タンスに収納する。代わりに、和服とか浴衣をそっとかけてさしあげる。

着脱の手伝いは、米国では夫が妻に、日本では逆に妻が夫に対してするわけである。

John led her by the hand.
He offered her a chair.
He helped her on with her overcoat.
He gave her his coat when it was cold.
He made the bed.
He carried heavy boxes for her.

**（4）車関係**

上の「庇い」は車に関する手伝い行為にも認められる。例えば、食料や他の日用品の買い出しはもともと妻の管轄であったが、車の社会が定着すると、運転するのは男の担当ということで、妻の買物に夫がつきあうようになった。この展開は日米共通であるが、しかし、実働の面で米国人男性の方が格段に協力的である。庇いの領域が日本人男性以上に広い。米国人は、スーパーへ groceries を買い出しに行くとき、ほとんど夫婦同伴である。日本では、妻が一人で cart を引いている場合が多い。

買物をして店から外に出るとき、また食事を済ませてレストランから外に出

るとき、女性の方は玄関先に待機している。駐車場にとめてある車の所まで急ぎ足でとりに行き、玄関先まで車を運び、いったん車から降り、妻のためドアを開け、妻が着席したのをみとどけて、閉め、それから買物の山を、一人で、trunk の中に収納し、すべての手順が整ったのを見届け、最後に運転席に座る—という行動をとるのは、米国において、男性の方である。日本人男性はたとえ同伴することがまれにあるとしても、chauffeur みたいに振舞うことはない(Fein & Schneider)。

米国のお父さんは運転手であるだけに、買物とか外食に連れていくだけでなく、妻のために職場へ、また子供のためにスポーツ観戦へ連れていったりする。これら一連の送迎も家事の一端とみられよう。日本人男性も、若い人は米国人並みに奉仕するようになっているが、実際的に、まだまだという感じである。

John opened the car door for her.
He closed the car quietly.
I promise to take you kids to the football.
Shall I take you to Pizza Hut?
I drop you at the front because it rains.

ここで「援護」に関して、米国人がいかに女性を庇うのか、大切に扱うのかを Parkinson 他による「女性に対する基本マナー七ヶ条」から端折って引用しよう。

一、建物や部屋に出入りするときは、女性を先に通す。またエレベーターに乗り降りするときも同じ。どの場合も女性が自分の前を通り過ぎるまで、男性はドアを押さえて待つ。

二、男性は車道側、女性はビル側を歩く。

三、車を降りるときは、先に自分が降り、女性側のところへ行き、開けてあげる。

四、女性がテーブルにつくときは椅子を引いてあげる。女性が座るタイミングに合わせて、椅子を軽く押してあげる。席を立つときも、椅子を引いて助けてあげる。

五、女性がコートを着脱するときも、手を貸してあげる。相手が腕をコートの袖に通しやすいように、低めに差し出してあげる。

六、社交の場では、女性客が到着する度に男性は立ち上がって迎え、女性が席についてから腰を下ろす。握手をするとき男性は立ったままであるが、女性は座ったままでもよい。

七、紹介するときは、先に男性を女性にそうする。男性が握手を求めても、女性は手をだす必要はない。

横道にそれたが、車関係にはもう一つ、洗車したり油（wax）を塗ったりする作業がある。この手入れは、日米共に、主として夫の受け持ちであるが、日本では妻も協力する。

John is topping up oil in car.
Make sure there's plenty of gas in the car for me.
He washed the car and cleaned up the interior before a date with her.

**（５）美化関係**

清掃また掃除を主として指すが、大きく屋外のそれと屋内のそれに分けられ、米国では前者が夫の、後者が妻の分担になるようである。理由は腕力を要するものと、そうでないものだからである。日本でも力仕事は夫に委ねられるが、妻の受け持ちになる場合が多い。

例えば、ゴミ出しは夫と妻のどちらの分担であろう。米国では、夫の、日本では妻の役割になるようである。これはゴミ入れの容器の重量によるかもしれない。あちらでは、私の覚えている限り、ドラム缶であり、こちらのはビニールの袋だからである。ゴミが袋詰めだからといって、決して軽いわけではない。女性が持ち運ぶには結構重いものである。にもかかわらず、日本で妻の役であるのは「内の家事は全て女房任せ」という認識が強いからであろう。

私の家ではゴミ出しの役は恒久的に私の当番であるが、近所の 8 割ぐらいは主婦が重そうに運んでいる。ご主人が出勤で駅へのついでに運んでいるのは極く希である。正直にいって、日本の旦那さんは、私を除いて、女性に対して自尊心が高すぎる。ここにも男尊女卑が見える。女性に対する労りの気持ちが無さすぎる。

米国の男性はゴミ出しだけでなく、屋内の掃除にも協力を惜しまない。一応は妻の任務であるが、夫も手伝う。この姿勢から妻が夫に Would you like to clean the kitchen for me? と頼み事をしても決して不自然ではない。夫が floor を mop で掃除する姿は珍しくともなんともない。しかし日本で夫が畳の間をホウキではく姿などほとんど見られないであろう。

John vacuumed the room yesterday.

He emptied the trash, because it was full.

I take out the rubbish at 4:30 as the track pulls away.

Mary had the room cleaned.

上の例に見る通り、米国の夫は屋内の掃除も補助的にこなすが、屋外の片づけは専属的に果たす。芝刈り、植樹などの庭の手入れ、それに家具の修理や工事なども、外部に発注しないで、自分で行なう。小規模の部屋を日曜大工として数ヶ月かけて作り上げることもある。車や自転車の修理などいとも簡単にやってのける。私はかつて彼らが種々雑多な大工道具を地下室に数多く備えているのを見て、プロの plumber かと勘違いしたことがある。

日本でも庭仕事とか修理は夫の受け持ちであるが、妻が引き受けている場合が目立つ。例えば次の例に見る清掃は米国において夫が行為者になっているが、日本の場合、妻が受け持つのが普通ではないだろうか。

John cleaned leaves from garden.
He removed dead rats from gutter.
He is mowing the lawn.
He planted the flowers.
If you don't retile the bathroom, I will call the contractor myself.
I'll repair the machine later on.

それからもう一つ、「洗濯」という大きな家事が残っている。この作業は、洗い、乾燥、coin laundry への持ち込みなどを含む。洗いと乾かしは機械がやってくれるので力のいる仕事ではない。しかし、ものによって、選択をしなければならないので、妻が一手に引き受けるのが普通である。洗濯物を乾かすのは、米国では乾燥機に入れるか、地下室に吊すかする。日本のように、物干し竿に下げないので楽である。洗濯に関わる作業は日米共に妻の務めとみてよいであろう。ただし、街角にある公共洗濯機に運ぶのは力を要するので夫が受け持つ。

なお妻が専属的に担当する家事に「裁縫」が加えられることを言い添えておこう。

Mary washed clothes with soap and water.

John took dirty clothes to laundry.

She will mend (repair by sewing) the shirts.

家事の内訳はまだ続きがあるが、一応これまでの分をまとめておこう。表の○印は主役的に、△印は補佐的に担当されること、×印はほとんど担当されないことを示す。担当者は夫、米国の場合兼業の、日本の場合専業の妻、それに子供とする。3通りの印は私の認識と憶測によるもので、例外は十分にありうる。

| | | 家事分担者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 夫 | | 妻 | | 子供 | |
| | | 米 | 日 | 米 | 日 | 米 | 日 |
| 炊事 | 料理 | △ | × | ○ | ○ | × | × |
| | 配膳 | ○ | × | △ | ○ | △ | × |
| | 茶造り | ○ | × | △ | ○ | × | × |
| | 皿洗い | ○ | × | △ | ○ | △ | × |
| 子守 | おむつ | △ | × | ○ | ○ | × | × |
| | 授乳 | △ | × | ○ | ○ | × | × |
| | 就寝 | △ | × | ○ | ○ | × | × |
| | 遊び | ○ | △ | ○ | ○ | × | × |
| 援護 | 庇い | ○ | × | × | × | × | × |
| | 着脱 | ○ | × | × | ○ | × | × |
| 車 | 送迎 | ○ | △ | × | × | × | × |
| | 買物 | △ | △ | ○ | ○ | △ | × |
| | 開閉 | ○ | × | × | × | × | × |
| | 手入れ | ○ | ○ | × | × | × | × |
| | 洗車 | ○ | ○ | × | △ | △ | × |
| 美化 | ゴミ出し | ○ | × | × | ○ | △ | × |
| | 掃除内 | △ | × | ○ | ○ | △ | × |
| | 掃除外 | ○ | × | × | △ | △ | △ |
| | 修理 | ○ | ○ | × | × | × | × |
| | 洗濯 | △ | × | ○ | ○ | × | × |
| | 裁縫 | × | × | ○ | ○ | × | × |
| | 工事 | ○ | ○ | × | × | × | × |

上の表から、縦に目を通すと、米国人夫また子供がいかに積極的に家事に従

事しているかが、そして一方日本人対応者がいかに怠慢であるかが、一目でわかる。また日本人妻の欄と夫の欄を見ると、顕著な差が認められる。この差は米国人の場合に比べ大きすぎる。同類の格差は日本と米国の子供の間にも見られる。

## 3　家事の新提案

家事の内訳は、一般に、これまでに述べてきたことがらを指し、他にはないように思われる。しかし、私は若干加えたい。理由は、米国の男性が家事に加担しようとする積極性の背後に潜む「騎士道」とか「キリスト教」を頭に置くと、上以外にもやるべき行為が実現してもよいように考えられるからである。男性が女性を保護ないしは庇うため車のドアを開け閉めするのと同じ精神が、例えば「記念日に妻に贈り物をする」という行為を生み出していると推理されるからである。これを肯定すると、「贈る」のは「料理したり」「皿洗いをしたり」「着脱を手伝だったり」などと同じ枠内に入れてもよいであろう。

差し当たり、「情愛」に基づく言動をこれまでの家事の延長線上にあるものとして提案しよう。次の小見出しの番号は上の（５）美化に続くものである。

### （６）情愛発言

上の２節の（１）で Kinkaid が人妻の Francesca に料理の手伝いを申し込み、この発言が彼女を心地よくさせたが、これと同じように、“I love you.”という家族間の情愛の発言も相手の気持ちをほぐすのに有効である。家庭内の人間関係を円滑に転ばすという観点から、家事の一分担として加えていいであろう。

情愛の発言がいかに家事を円滑にするかは、現に、米国において“I love you.”が夫と妻、親と子、子と子の間で頻用されていることからもうなずけ

よう。家族間を円滑にするということで、家事の一端としたい。次の助言と実行を家事の一つの務めだと見たい。しかしこの発言は有効でありながら、日本では皆目認められない。日本では夫が妻に、母親が子供に「愛しているよ」とか「好きだよ」と呼びかけることはほとんどない。ないだけに、次のアドバイスは注目に値する。

Tell her "I love you" at least a couple of times everyday.

なお、情愛表現については拙稿「日英語における愛情表現の指向性」で詳しく言及したので、そちらに譲りたい。

家族間の情愛は“I love you.”以外の表現によっても表わせる。その一つが、「ほめ言葉（compliment）」によってである。次の発言も妻を心地よくさせるという観点から、家事運営の潤滑油といえる。この油も日本にないだけに注目される。日本人が家族同士でほめ合わないのは、自画自賛に等しくなるからであろうか。

You're a great cook.
I love your hairstyle.
That dress looks good on you.

ほめ言葉も、米国では活用が推奨されていることが次の助言で押しはかれるが、日本では他人に対しては当てはめられても身内の者に対しては聞かれないであろう。

When she prepares a meal, compliment her cooking.

「謝辞（gratitude)」も何らかの行為をしてあげたことに対して、口頭に乗せられると、してやった甲斐があったと喜ばれるであろう。この心地よさのため、米国人は盛んに活用する。シャワーあがりに下着をとってくれた女房に対して、また食卓の塩の瓶を回してくれた息子に対して、夫また父親はすかさず、丁重に Thank you.の一言を忘れない。しかし、日本ではどうであろう。「ありがとう」という言葉はあってなきが如しではないだろうか。何故、日本人は謝辞を出し惜しみするのか。身内の者に改まって言うのは、他人行儀に響くからであろうか。とにかく、言う・言わないの違いがある。次の助言はこの違いから別々の印象を与えるであろう。彼らは別に耳新しいことではないと、我々にはないものねだりだと受けとめられるであろう。

Verbally say thank you when she does things for you.

それから「共感（empathy)」の呼びかけも、相手と喜びとか悲しみ・痛みを分かち合うというのであるから、快感につながるので、上と同様、家事の円滑化を促進する。相手が何か快挙を成し遂げたとき、Congratulations!（おめでとう）と、また悲観にくれているとき、I'm sorry.（お気のどくに）と言葉をかけることは、相手の気持ちを解すであろう。この心理は普遍性があるだけに、日米共に使用が奨励されるであろう。次の英語での助言は日本語にも当てはまる。

Whenever her feelings have been hurt, give her some empathy and tell her "I'm sorry you feel hurt."

もう一つだけ、相手の陳述に「傾聴」することも、快感につながるので、果たすべき家事の一端と認めてよい。心がけるべき配慮の一つと認定してよい。

しかし、実際的に実現されているかどうかは疑問である。妻の愚痴、不平不満、抗議などに心静かに耳を傾ける夫は数多くいるであろうか。私は日米共に少ないのではないかと憂える。男は、日米に関わらず素性的に受動的になれないからである。女性に対して特に能動的になるからである。男は女に対して普遍的に問題の解決者にはなりえても、受け身的な聞き手にはなりがたいようである。この好ましくない素性を改めるためにも、次の助言は両国の男性に向けられるべきであろう。

When she talks to you, put down the magazine or turn off the TV and give her your full attention.

**（7）情愛行動**

情愛の気持ちは、言葉によってだけでなく、実動によっても具現化されるので、上と同じように、家事の望ましい一形態だと認めてよい。実動の内訳はいくつかあるが、まず「贈る」という行動が挙げられよう。夫婦間で、特に夫が妻に贈り物をするという慣習は米国において顕著である。夫婦関係を潤す手立てとして活用されている。次の助言が活かされている。具体的な助言がいくつも編み出されるということは、裏を返すと、実態が存在していることの証になるであろう。

Buy her flowers as a surprise.
Give wild flowers your hand picked yourself.
Buy her little presents like a small box of chocolates or perfume.
Buy her an outfit (take a picture of your partner along with her size to the store and let them help you select it).
Bring her cut flowers as a surprise as well as on special occasions.

Bring home her favorite pie or dessert.

しかし、上に見る「贈る」という行為は、日本において、それほど定着していない。若い男女間では多少見られるかもしれないが、いったん結婚し夫婦の間柄になると、「釣った金魚に餌いらぬ」の喩えになる場合が多い。日本で夫が妻に贈るのは、別の意味合いになりやすい。例えば御前様の旦那さんが手に寿司をぶら下げてもって帰るのは、償いのニュアンスが強い。上の例に見る贈りの背後にあるものとは違っている。

もう一つ上げるが「愛撫する」のも情愛行動の具現化だと見てよい。米国の夫は、年配者でも、公の場で妻を身体的な接触で愛おしむ習慣を身に付けている。膝の上に抱っこして、背中をさすったり、頬に口づけしたりする。こういうラブ・シーンは日本人には年甲斐もなく嫌らしいの一言に尽きるが、彼らには重要な情愛の示し方になるようである。次の助言に見るさまざまな愛撫行動を家事の内訳に納めるのは語弊があるかもしれないが、一応、家庭円満につながる、したがって家事の手伝いの一つになると私は見たい。

Give her four hugs a day.
Give her a back or neck or foot massage.
Make a point of cuddling or being affectionate.
Touch her with your hand sometimes when you talk to her.
Give head and foot massage.

引用が遅れたが、上記の助言は主として参考文献から適宜 pick up したものである。

以上、情愛に基づく家事とその担当者を整理してみよう。次の表が得られる。

| | | | 家事分担者 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 夫 | | 妻 | |
| | | | 米 | 日 | 米 | 日 |
| 情愛 | 発言 | 情　愛 | ○ | × | ○ | × |
| | | 称　賛 | ○ | × | ○ | × |
| | | 謝　辞 | ○ | × | ○ | × |
| | | 共　感 | ○ | △ | ○ | ○ |
| | | 傾　聴 | × | × | △ | △ |
| | 行動 | 贈　る | ○ | × | ○ | × |
| | | 触　る | ○ | × | ○ | × |

## 結　　び

日米文化また見解の相違による家事分担者の特定化についての言及・議論はここで、一応の区切りとしよう。読者のご指摘を待つまでもなく、叙述の欠損・欠陥は筆者自身が十分に承知している。なんらかの家事について米国人男性は担当するが、日本人男性は担当しない―といった把握の仕方はもともと大ざっぱすぎて、売り物にならないものである。これを承知であえて霧の中に身を投じた私が罪作りな話である。しかし、とそれでもなお開き直りたいが、たとえ漫然としていても、論点の分担者についての振り分けの違いは日米の間にしかと存在するのではないかという感想が頭角を表わし、上記の論述となった。要約は 2 つの表で示した通りである。これから舵をとられながら、軌道修正をしたいと思っている。

## 参 考 文 献

Allan & Barbara 2002 : Why Men Lie and Women Cry, Orion.

John Gray 1992 : Men are from Mars, Women are from Venus, Harper Collins.

Ellen & Schneider 1995 : The Rules, Warner Books.

板坂　元　1989：データで見る日本 VS アメリカ、PHP。

Kyoto Mori 1997：Polite Lies, Fawset Books.

中村平治　2002：Help の言語活動、福岡大学人文論叢。

中村平治　2002：日英語における愛情表現の指向性、福岡大学研究部論集。

Loraine Parkinson 他　1989 : This is American Style. セルネート。

Roseman & Kato 1997 : The American Mentality, Macmillan Languagehouse.